

中國の廢仏と興仏

塚 本 善 隆

今日は細かい考証などは省略いたしまして、大筋を、自分の感じますことをまじえまして申し上げます。

中国における廢仏毀釈と申しますと、普通、「三武の法難」といいまして「武」と名付けられた、三人の天子によつて行なわれた廢仏が、一番有名でございます。それはそれといたしまして、中国の仏教史が少なくとも中華人民共和国の時代までずっと蜿々として続いておりますが——今日かなり大きな屈折が起つておりますけれども——、わたくしが感じますことは、こんなに大きな廢仏があつたにもかかわらず、実は廢仏は興仏の良き縁をなしているというところでござります。

日本につきましていえば、今日の仏教の研究が隆盛になり、しかも文科系の大学に仏教に関する講座ができるおりましてのは、わたくしは明治初年の廢仏毀釈のおかげであると思います。あの廢仏毀釈がなかつたら、今日の仏教界の少なくとも研究部門に、あるいは社会活動において、おそらく今日のような力を生み出すことはなかつたであろうと思うのであります。廢仏がなかつたら、もつと衰えた旧態依然とした仏教が今日までわざかながら続いておつた、寺に残つていつた、という状態になつておつたのではないかと思われます。

さて、それと同じようなことが中国の廢仏にみられるのでございます。まず第一の廢仏毀釈のことを簡単に申し上げますと、いわゆる「三武の廢仏」の中の一番はじめは、北魏の時代の廢仏でございまして、北魏の第三代の太武帝

という天子のもとで行なわれたものでございます。太武帝は四二四年から四五二年まで在位しており、この間に行なわれたのであります。

それを行なつた立役者の一人は寇謙之という道士でございます。もう一人は宰相であり、儒学に深い崔浩（三一四至〇）でした。この二人にある意味では操られて、或いはその二人の活躍によつて、北魏の帝国が非常な上昇期にあります。そのときに、この若い太武帝によつて廢仏毀釈が断行されたわけでございます。簡単に申しますと、寇謙之という人は武帝の即位する前に、禪宗の達摩大師のお寺で有名な嵩山、洛陽に近い嵩山の洞窟で道教の修行をいたしました。そして長い修行の後に、寇謙之はある道教の宗教的な自覚に達しました。そして彼は天神から親書を授けられましたと称しました。その天神が夢に何回か現われまして、『汝がもし北方の太平真君を助けて、立派な皇帝たらしめることができたら、汝も仙人になることができる』という布告でした。そこで彼はその夢告の信者として、同時に授けられた親書を持ちまして、北方太平真君の太武帝のところへ、その親書を持って行きました。ところが太武帝のほうは、半信半疑ですぐに信用する様子がなかつたのであります。

ところが崔浩は漢人でございます。一方、皇帝は托跋部の出身でして、鮮卑という遊牧民の一部族でございます。この托跋部の皇帝が華北に進出し中国を支配するようになりますと、どうしても中国人の宰相の助力を得ねばなりません。その助力を仰いだのが崔浩の父親であります。その父親は、建国の際の非常な功臣でございました。したがつて崔浩はその功臣の長男として、早くから皇帝と近づきになつており、そして将来を嘱望されておつた人であります。ただここで三代目の時に問題が起りました。それは極めて素朴な漢民族の文化をまだあまり知らない鮮卑族の諸将軍は、これは千軍万馬の間を往来して、色々な生死の境を越えてここまで至つたという自負をもつておりました。それにもかかわらず、ただ文字を知つておる、文章の書けるということだけで中国人が採用されて上にのさばつておるのはけしからんという気運がたかまつた。『我々鮮卑族の功臣が、北魏をうちたてた。その功臣がそのまま北魏の実権を握るべきである。文章が書けるというぐらいの漢人の宰相は、一応、外に放出したほうがよかろう』というよ

うなことで、天子の即位したのが十六歳という若い天子のもとで、その鮮卑の諸将軍や、建国の元老たちが、この崔浩を失脚させたのであります。

ところが崔浩という人はですね、伝記にも書いてありますが、大変なヤサ男で色の白い、しかも大変に頭脳明晰な人物であり学者であります。ですから軍馬の間を走り回つておる鮮卑族の將軍たちからは、こんな青白いインテリが、ということで、一層敬遠されまして、とうとう宮廷から追い払われたのであります。そこでこの崔浩は、非常に失意の中に時を送りました。機会があれば、もう一度政界に返り咲きたいという心を抱きながらも、どうすることもできないでおりました。この人の家は、家庭の宗教としては道教の信者でした。そして非常に仏教の嫌いな人であります。

例えば、自分の妻君がお經を読んでおったのを見つけて、その經典を焼いてしまって、灰にして、そして便所の中にそれを捨ててしまつた。家の中に仏教の經典などを持ち込んではならん、といったといわれるほど仏教嫌いであります。そしてその頃、殊に仏教が非常に盛んになります。自分は失意の極にありますので、いよいいらいらしております。

ところで——鮮卑族は北の方の蒙古においていましたときは、仏教のことは知らなかつたのですが——今の山西省の大同というところに都を移しますと、段々と漢族文化化してまいります。また漢族のたくさんおるところを治めるには、どうしても漢人を採用せねばならなかつた。そして仏教はその間にどんどん盛んになつておりました。当時の記載によれば、四月八日の祭が非常に盛大に行なわれました。もとより釈尊の誕生日に因んだもので、仏像を乗せた車がねり歩いたのであります。この祭が大同という都で行なわれますと、これには皇帝以下のものが参觀したといわれます。一方、崔浩はこれを見ると非常に向かつ腹が立ちまして、自分の家に飛び込んで、裏庭で天のお祭をして仏教を呪つた、といわれるようなことが伝記にも出ております。要するに、極端な仏教嫌いであります。しかしながら、非常な儒学者であります。そういう人がたまたま寇謙之という道士に出会つたのであります。寇謙之は天の神から授かっ

たという神書を持って、そして自分は北方の真君を助けて、そして立派な政治をやらしたならば、おまえも仙人になれるぞ、というお告げを受けて、それを信仰して実はやつて来たのであります。はじめ太武帝はその書物を受け取つたけれども、半信半疑であります。そのときに出で來たのが崔浩であります。そして、凡そ立派な名君が出るときには、天が瑞兆を下すものであるが、今日呼ばないのに、召さずしてやつて來た寇謙之という道士がおられるのはそのまましるしである。しかもその人は天から授かつた書物を持つて來た。そして天神のお告げを請うたのは、明らかに誠意が天に通じたからである。必ずこの人は仙人におなりになるであろう。是非ともこれは、この人を人民の指導者に仰ぐべきである、と申してとうとう寇謙之を宮廷に推薦するのです。そうすると寇謙之の方も、今日の社会に天子をお助けする政道の達人というのは崔浩を除いて他におられません。是非とも崔浩に政治の助力を得られなければ、立派な天子におなりになることはできないでしょう、ということで、失脚していた崔浩も、また朝廷に召されることとなります。この二人が若い天子を段々と道教化いたします。同時に漢文化化していこうとします。

ところがこの若い天子は、別に道教の研究者でもなければ、仏教の研究者でもない。そんなことを研究するよりも、先ず中国を如何に征服するか、という問題が先決であります。征服力に燃えている天子でした。確かに北魏はこの天子の間に征服に征服を重ねまして、そして国は大きくなり、東は山東の方から西は甘肅まで支配する大きな国になつてきました。そこで、太武帝という素朴な天子は、この二人を弟子として、事務の顧問として、今度の征服は大丈夫だろうかということを占なつてもらつたり協議したりました。そして、それがうまく適中いたしまして、太武帝という人は益々この二人を、信ずるようになりました。そうしたところが、甘肅の征服の事件がおこり、二人の協議を得て見事に成功いたしました。甘肅省の北涼を征服したのであります。

ところで、こういう征服に対して、注意しておくべきことは、段々と道教化しておる天子が、大変な軍隊を出して、大きな征服を次々とやらなくてはならん場合に、どうしても必要なことは、生産をする人、あるいは兵力に加わる人、人的資源が、軍事につらなる人が要求されます。この北涼の征服の直前にですね。天子はこういう命令を出し

ております。“沙門が非常に多い。その坊さんの五十歳以下の者はみな還俗しろ、五十歳以上のものは認める。”といつております。五十歳以下ということは、労働力をもう一返国家に奉仕せしめるような労働力に加えていこうということでありましょう。そして、その後で甘肃省の征服が行なわれていてあります。そのことを言い換えれば、仏教抑圧政策が一步前進したということになります。盛んになつてきた仏教に対して、帝は好意を寄せなくなつてきました。そして二人の顧問が仏教嫌いである。その中で仏教への彈圧が一步踏出したということに外ならないのであります。ただし、ここで注意しておかねばならぬことは、後から出てまいりますのですが、この甘肃の征服ということを言い換えれば、実は仏教の一番盛んな地方を征服したということであります。西の方から敦煌を経て、甘肃に伝わつて来る仏教の非常に盛んな所でした。そして、征服したときに都であります大同の地方は、また人口が少なく過疎地帯であります。こうして、征服しまして、その地方の人民を強制移民いたします。やはり、甘肃の征服の後でも、甘肃の人民をたくさん大同の方へ強制移住せしめています。ところが、その強制移住せしめた人たちの中には、仏教信者も多かつたし、僧侶も入つておつた。熱心な仏教徒が強制移民と共に、大同の町に入つてくることになる。それが後に活動するわけであります。

ところで、この太武帝の道教化はその後、四四〇年に年号を太平真君と改めます。ここになつて、はつきりと自ら道教的な天子であること表明することになるのであります。年号が改元されてから、やがて太平真君三年(西晋二年後には、天子は道教の壇——道壇と称しますが——を築いた。道教の壇に登つて、そして道教信者であるという儀式をいたします。丁度、仏教界で在家人が大乗の戒壇に登つて、大乗佛教徒であるということを証明してもらうというような儀式だとお思いになればいい。そして、そこまでいきますと、今度は太平真君五年、またわずかたちまして、詔勅が出ております。“いったい沙門の輩は、西の夷の虚誕を借りてきて、人民を惑わすものである。これは、政道を一にする所以ではない、天下に順徳すべき所以ではない。王皇以下庶民に至るまで、自分勝手に沙門や巫女を養つておるものは、二月十五日限り、官にそれをおせ。期間までに出さない場合は、沙門も巫女も死刑にする”

どうなります。こういうような厳しい詔勅を出しています。言い換れば、沙門は私の家に養つてはいがん。この頃、沙門の学者あるいは研究者は、王侯の家あるいは金持ちの家に養われておりました。そして在家人が仏教の指導を受ける。或いは功德を積むということをしておつたのであります。そういうことを一切厳禁にしております。ここでまた仏教の弾圧が一步進んだわけであります。

ところが、その翌年、実は長安に反乱が起つております。長安にある蓋呂と称する者が反乱を起し、そこでそれを鎮静する軍隊を太武帝は出してあります。そして自ら軍を率いて行つておるのですが、途中で色々戸惑うことがあります。長安まで入りましたところが、蓋呂はさっさと逃げて、北の方の山に入つてしまつた。そこで非常に憤慨し、またがつかりいたしました太武帝は、せつからく鎮静しながら、蓋呂を逃したとじだんだを踏みました。ところが、その長安で、そこを占領して、休憩しております間に、ちょっととしたつまらないことが起つりました。それは、天子の御者が天子の御馬を、お寺の中に引いて休息に行きました。その寺の中に麦畠がありまして、馬に餌をやりに行つた。ところがなにぶん、戦勝者の御者であり、天子の御者が来たというので、そのお寺の僧侶たちが丁寧に扱つて奥へ通して、酒を振舞つた。そうしたところが、奥で酒を飲まされたその御者が、お寺の中に弓矢のあることを見つけまして、それを、まあ手柄顔に天子に報告に行つたんです。天子は戦争の敵が逃げてしまつたということで、いらっしゃしておりました。それを聞いた天子は非常に怒りまして、武器を持っておるお寺がきっと内応しておつたんだ、怪しからんというので、さらにもつと徹底的に調査をさせるために、役人を送つたのであります。役人が奥の方に入つて、細かに調査をいたしました。その報告がまた悪かったです。というのは、奥深い部屋は沢山ございまして、そこには富豪や官吏が、沢山献納した品物がございました。それから、さらに奥へ行くと、部屋が曲りくねつておつて、そこは上流社会の婦人たちが僧侶と密会する場所であった、というようなことを、手柄顔に仏教嫌いの天子に過大報告しました。天子は非常に怒り、怒り心頭に達しました。『僧侶をみな殺しにせよ、すぐに天子は長安の寺院を全滅させよ』という命令を出したのであります。それと同時に使いを大同の都に出しまして、大同の都に

は皇太子（恭宗）が留守番役をしておりましたが、皇太子に、早速、全国に御触れを出して、長安と同じように「全寺院を破壊してしまえ、僧侶を殺してしまえ」という命令を伝えるようにという指令を出したのであります。

ところが、その皇太子というのは非常な、敬虔な仏教信者であった。それでですね、いろいろな手を尽して、あるときは天子に対して手紙で、承知しました、仏教寺院を壊すべき必要があるならば壊しましょう。しかし、大寺院を壊すまでもなく、これから修繕をしないということで、五年か十年の間放つておけば、自然に壊れるではありますか。わざわざ破壊をやるまでもないと思います、ということで、日を延そうとしたのであります。また、あるときは、そういったことの往復の間に、自分の信頼をしている僧侶たちに、あなたがたは早く逃げてくれ、身を隠してほしい、ということを勧めました。そして敬虔な仏教徒たちは、小さな仏像などをみんな山に運んだり、自分も身を逃れたりいたしまして、立派な高徳の僧侶も助かりました。しかし、破壊の時間が多少は延びましたが、結局、破壊は太武帝の命令どうり、厳命どうり行なわれたのであります。このようにして、北魏の国家が相当大きくなったときに、仏教の僧侶もなく、仏像もなく、経巻もなく、寺もなく、あらゆるもののが国の事情から活動ができない、消えてなくなるという現象の廃仏毀釈が行なわれました。

ただ、ここで注意しておかなければならぬことは、寇謙之という人はその命令が出ると、天子にですね、「そういう乱暴はしなくていいだろう。そういう、僧侶をみな殺しにするということはしないほうがいい」と主張したのであります。ところが、崔浩は「そんななまやさしいことをいったのではいかん、この際、僧侶はみな殺してしまえ」という急進派であります。寇謙之が宗教家であつたからでしょうが、そういうことはやめましょうと進言したが、結局こういうことは急進派で、しかも過激派の方が勝つわけであります。結局、破壊が行なわれたのであります。

さあ、そこで破壊の後にどうなつたかということであります。その後に、皇太子が武帝に先立つて死になります。太武帝はがっかりします。そして、やがて太武帝も亡くなる。ところがですね、先程も申し上げましたように、四月八日の釈尊の誕生祭が非常に盛大に行なわれておつたような状態ですから、民衆はですね、仏教の復興を非常に願つてお

る。そして、太武帝の孫が即位いたしますと、すぐに仏教復興の詔勅（四至）が出るのです。そのときのことを『魏書』の「釈老志」という中に、その詔勅を「朝に聞いて、夕を待たずして、壊された寺の復興が始まった。」と、書いておりますから、いかに一般の民衆が、仏教の復興を願い求めておつたかがよくわかるのです。そういう熱情がありましたので、どんどん仏教は復興いたしますが、このときに現われたのが、曇曜という非常な手腕家の坊さんであります。曇曜はその復興の舞台に出てまいります。先ず、自分の先輩である師賢も、実は甘肃省から来た人であります。その師賢は甘肃省から来たインドの坊さんであります。先ず、その先輩であり、師匠であるインド人の坊さん佐役を勤め、そのうちに曇曜はお師匠さんの師賢が亡くなりますと、自ら第二代の沙門統になってしまった。そして宗教行政を一人で行なう。その曇曜が、先ず計画しました一つの仕事といいますのが、有名な雲崗の大石窟を造るという事業であります。これはですね、従来のよくな廢仏に刺激されまして、もう移動のできない山自身を石仏にしてしまった。仏像は全て大地から根をはやして、外へ持つて行くことができないような仏像にしてしまう。廢仏が簡単にはできないようにしてしまつたといふことが一つ。それから、もう一つは曇曜が造りました五つの大きな五窟があります。その五大窟は太祖以下の五帝になぞらえて、非常に巨大な仏像をつくつた、と『魏書』に書いてあります。太祖以下の五帝と申しますと、太祖からこれは三代目です。この人の皇太子で非常に仏教信者であり、この曇曜なんかを非常に信頼してくれた人でありますか、即位せずに亡くなつたのであります。その皇太子と現代の天子、その五人なんです。

そこには北魏の絶対君主権のもとに、仏教を復興しようとする沙門統曇曜がですね、現在の皇帝が仏教を保護するならば、それは釈尊が帝王に、王様に、仏教の後のこととを委嘱せられたんだから、これは帝王は現在する釈尊であるとみたのである。五つの皇帝、五代の皇帝の尊像を仏像として造つたのであります。

これは、換言すればですね、北魏の国家が続く限り、北魏の進軍はその仏像に破壊を加えることはできない。天子

を破壊することになる。仏像は天子として破壊を加えさせない。同時に、天子でありますから、ここを通る国民は礼拝をしなければならない。天子に対し礼拝しなければならないということになります。

今、大同のあります所はですね、実は北魏の鮮卑族か故郷へ絶えず往来しますとき、大同の前や雲岡の前を通つて行かねばならない所にあるのです。そういう所にありますので、北魏の素朴な民族が、故郷へ帰つていくのにみなあの大同の石仏の前を通つたわけです。素朴な北魏人がそれによって、仏教化されることが著しかったことが推察されるのです。

そういうことをやつたのですが、この他にもう一つ重大なことは、曇曜という人はですね、この五大窟を造り、そして、石窟をどんどん造つていつたんですが、その他にもう一つ大事なことは、復興します仏教教団の経済的な基礎を確立した。それはつぎの二つの制度を作つたのであります。僧祇戸と仏団戸であります。僧祇戸は平齊戸ともいいます。僧祇戸のほうは、中国の仏教の歴史の大家であります『仏祖統紀』の著者である志磐が、その意義を「平民齊戸之義」と、はつきり注釈を加えておるのであります。つまり、一般の北魏の平民のことであるというのであります。こういう注釈を加えて以来、それがずっと後まで影響しておつたのですが、実はそうではないのであります。『魏書』を綿密に読みますと、平齊は、齊を平らげたとみるべきであります。つまり、当時、北魏は山東地方を平らげてその地方の人民を大同の近くに移し、そして、平齊郡という郡を置いたのであります。平齊戸とは平齊郡戸ということなのであります。その平齊郡戸は、言い換えれば、北魏に反抗して降伏した漢民族なのです。それが大変肥沃な山東の土地から移されて、荒涼たる大同の付近の砂地の多い、水の少ないところへ来て、故郷を懷かしんでおる人たちです。したがつて、早く故郷へ帰りたい。こんなところで耕作はしたくない、というようなことで、平齊郡戸とは実は、絶えずごたごたばかりが起つて、農業生産も充分にできなかつた戸なのでありました。

山東で長く抵抗した敵の武将をはじめ、平民、人民たちをここへ集めていた。きびしい監督をしなくてはならない。干渉しなければ、いつ何どきどういうことが起るかもしない。やつかいな郡であるし、しかも都に近い。それ

に対処するために曇曜がですね、つぎのことと言つたのであります。『平齊郡戸の人々をわたくしの僧団つまり宗教教団へ、移して下さい。わたくしが仏教教化をもつて、立派に平和に治めていきましょう。ただし平齊郡の戸が税金として治める粟などの米類は、これを税務所に納める代りに、僧曹つまり、わたくしの方の役所僧曹に納めて下さい。そうすれば、この僧曹に納めた税金の粟は積立てておきます。』北魏における一つの重大な問題は、たびたび日照りが起こります。荒年のためにわたくしたちは、この積立てておいた税金の粟を保護して、救済事に使用することにいたしましょう、というのでした。

それから、農民はですね、冬になつて薄く糲を食べ尽してしまつたというような農民が多い。その農民へは、この僧祇粟を貸しましよう。次の年の秋に実つてから、若干の利子をつけてこれを農民から僧曹に返してもらう。僧曹はまた、それを積立てておきましょう。こういうことを言つたのであります。それで、政府はこれで厄介払いができるし、そうしてくれるならということで、曇曜の管轄下に移したのであります。曇曜はそれを機会に、平齊郡だけではなくて、北魏治下における各郡各都市において、もし政府に納める代りに、粟を僧曹に納めさせて下さいというものがあつたら、みなそれを僧祇戸としたいというのでした。それも許可されたのです。そして許可されたのみならず、協力ができるとして、僧祇戸・僧祇粟は積立てられて、そしてそういう民衆の益利資金みたいなものですね、俗にいう金融です。あるいは飢饉に救済する事業に当るのみでなく、残りができたら、それをもつて仏教事業をしてもらろしいという許可がでてきております。言い換えれば、それは大きな財源を僧侶が長官である宗教局が司どつて、それを社会救済事業、行政の方面に使うことが出来るようになりました。毎年飢饉があるわけでもありませんから、残った財源をもつて、いろんな仏教事業をやることが出来るようになりました。

そこで、仏教信者の多い北魏では、僧祇戸・僧祇粟がどんどん増えてきた、ということが書いてあります。後のことですが、それが弊害を生みまして、金持ちが僧曹と結託いたしまして、こここの僧が積立てておる僧祇粟を、安い利益資金で借りてきまして、それを又貸して、高利を貪ぼる富豪がたくさん出てきました。苦しむのは、結局、農民

たちである。非常な利子をつけて返さねばならないだけでなく、抵当物件として牛も馬も入れておりますので、抵当流れになりますと、一家離散しなければならない状態となつてまいります。そのようなことになつて、大変かわいそうな農民がたくさん出てきたことが書いてあります。

それから、もう一つは、囚人対策です。北魏のはじめは、重罪犯人がたくさんあつて、どんどん牢屋にぶち込む。その牢屋が満員になつておつたわけです。そのときに曇曜はですね、いま牢屋が満員である。今後、罪人が増えないためにも、わたくしがこの囚人を寺の管理の下で管理しましよう。寺へ囚人を移して、その代り、寺ではその囚人に仏教教化をあたえ、あるいは三帰戒を授けるのです。そうしておいて寺の寺田開発、耕地の開発、あるいはいろいろな寺の奉仕、そういう寺のことにつ事さす奴隸といたしましよう。寺のことにつ事する奴婢といたしましよう。そしてこういう者は、社会的な犯罪を犯す由縁のないように寺で引き受けましよう、というのでした。まあ、日本で行なわれた仏教社会事業に似たようなことですね。ただ、ここで注意しなければならないことは、曇曜はそういうことによつてですね、復興をどんどんしつつある寺に、労働力を集めることができたということです。教団の管轄下にたくさんさんの労働力がおかれるようになつた。このことは、その僧祇戸と仏団戸とは、仏教教団全部が壊されたあとに復興する仏教教団に、復興の労働力、そして活動の経済力、両方を与えたわけであります。

誠に巧みな手腕だと思いますが、曇曜はそういうことをやつた人であります。雲嵐の大石窟には、おそらく非常な人が使われていると思いますが、そういうものの中にも、おそらく仏団戸というものをずいぶん使用したと思ひます。そういうふうなことによつて、仏教は復興いたしました。そのほか曇曜は、色々な經典の翻訳事業などもやつております。たしかしその場合にもですね、曇曜という人のやつた翻訳をみると、原典からの翻訳というよりは、むしろ從来民間にも行なわれ、誰れでも知つているようないろんな因縁話を集めたものを編集し、そしてまた、仏陀以来どういうふうに仏教が伝承されてきたかということを書いた一種の歴史のようなものの編纂をやつております。その編纂したものに出てくる説話文学は、実は雲嵐の石窟の中に彫られておる壁面などにも出てまいります。言い換

えれば、曇曜は非常にむつかしい般若とかなんとかというような經典を訳さずに、どこまでも民衆と接している、民衆が聞いて喜こぶような説話的なものをあつかったのです。それが雲崗の石窟にもあらわれてきています。

いづれにしても、曇曜という人は、仏教教義における誠にその時代の要求に応じた智慧をもつて、仏教の復興を急速にやつた人だといえるのであります。このようにして仏教が復興いたしまして、やがて高祖孝文帝（四七一—四九八）という天子のとき——曇曜のおそらく晩年でございましょう——に一百年の祖宗以来の大同の都をして、洛陽に移つて、そしてここから非常な急速に、天子自ら北方の民族の全てを、なかば強制的に漢文化に慣れ、できるだけ漢文化を模倣するようなどいう方針のもとに、国風というものがすっかり一変してしまいます。洛陽は仏教のもう一つの中心地でありまして、彼等が仏教を崇拜することは、ほとんど漢文化化するということになったのであります。そういうことで一層、孝文帝以後も北魏全体が非常な熱心な仏教崇拜の事態になつてしまふのであります。

この時代に達摩大師は洛陽に来られたわけです。その達摩大師が、余りにも盛大な洛陽の寺院の壯麗さに感歎して「南無仏」と称したといわれております。しかもその達摩大師が、都市仏教に見切りをつけ、嵩山に入つたといふところにわたくしは仏教の革新的運動が芽生えてきているということがよくわかるわけであります。

つぎに簡単に第二の廢仏を申し上げておきます。第二回目の廢仏は北周の武帝の廢仏（五七四—五七六）であります。これは極めて簡単に要約しておきます。

さて、その武帝の廢仏は、先に述べた北魏太武帝の場合と少し違いまして、実に奇妙な廢仏です。これは仏教と道教それに儒教の經典ないお社を、全部破壊したのです。注意すべきことは、仏教と道教の宗祖は、まことに偉大な聖者である、その聖者の教えは永遠に残し伝えるべきものである、ということを認めての廢仏なのです。簡単にいいますと、北周の武帝という人もですね、その皇帝でありますが、最初は自分を養育してくれた叔父に対する気兼ねから、政治に口出しをせず天子として祭事だけをやつたのです。軍事とか、そして儒教經典の講義をやっておりました。儒教の学者それから仏教、道教の学者を集めまして、そういう三教は結局一つになるべきものであるうという論

議をしておりました。詳しいことは知らないが、この教はみんな一つに帰するものではないか、そういうことを目標において、三教の学者の懇談会、討論会を何回もやつておるわけであります。ところが、その結果は、皇帝の意志に反して、儒教は激しい論争をしませんが、仏教と道教とは物凄い喧嘩をするのです。それもつまらないことに拳足取りの喧嘩をずっと続けます。その結果、結局、天子は三教とは一つにならないのだという結論だけが得られたわけです。

ところが武帝はですね、北シナの統一を何よりも大事にする、やがて自分の専制君主権が確立いたしますと、すぐに準備にかかりましたのは、北シナ統一の征服事業であります。その征服事業を行うについて、こういう思想が三つに分かれることは、ことに二つの教団が、唯みあつたりしては困ると氣をもんでおりました。そういう時に四川省の僧である衛元嵩という奇妙な坊さんがやってまいりました。誠に変な坊さんであります。四川省ははじめ梁の国に属しておった。それが北シナの征服によって亡ぼされて、亡国の民となつた。そこで結局衛元嵩は僧になつた。たいへん名譽欲の強かつた人でした。坊さんになつたけれども、ただの坊さんではつまらない。有名な坊さんになりたい、名僧になりたい、高僧になりたいと、非常に望んでおつた人であります。その人が師匠から、それほど有名な坊さんになりたければ、予言者のように訳のわからんような詩をうたつて、街をほつき歩け、と教えられまして、それをその通りにやつてみた。ところが、それで非常に有名になつた。気違ひ坊さんのまねをして有名になつた。気違ひ坊さんで有名にはなりましたが、それで満足しないで、今度は、今の北周の都へ関所破りをして出かけていきました。そして皇帝がですね、いま征服し民衆を統一することに非常に熱心である、ということを聞いて、皇帝のところへ詮索に行くのです。その詮索はですね、要は“あなたの国は、仏教も道教も非常に盛んでありますが、わたくしが拝見したところによれば、お寺はみな「曲見伽藍」である。小乗の曲見伽藍、小乗佛教徒が住んでおる、利己主義者が住んでおる曲見伽藍である。平等の慈悲というものを実現するために、釈尊は説法されたのであるが、その慈悲が実現されないで、利己主義的な曲見伽藍ばかりたくさんあるのはあなたの国である。わたくしはこういう曲見伽藍

を、むしろ廃止して、平等の慈悲の行なわれる「平延大寺」というものを造つたら良かろう。平等の慈悲を根本とし、大乗の仏教の行なわれる平延大寺二ヶ寺を造る。その平延大寺は、いまのような曲見伽藍を焚いてしまい、虫を殺したり、人民を労苦させたりするのではなく、国家そのものを平延大寺といい、柱もいらんし、床もいらん、国そのものを平延大寺とする。そして、あなた天子は、お經の中に釈尊が入滅されたときに、国王にその後の仏教の隆盛を委託されていった。あなたがもし、平等の慈悲を実現する国家をつくるならば、それは釈尊を現代に生かした、現代の仏と同じことだ。それさえ実現すれば、あなたは生き仏である。また、大乗仏教の興隆者である。そして特別な僧侶をつくらなくとも国民全体を坊さんとすればよろしい。それから寺院住職という幹部は大臣や將軍などの中から選んでなつてもらえばよろしい。それから、天子と大臣と民間、武官の非常にすぐれた人が、この平延大寺をもつて、平等の慈悲をこの国に実現する。すなわち、天子は生き仏であるし、大乗仏教はそこに行なわれる。』『こういう、突飛なことを極言したのであります。

武帝は國を挙げて戦争に突入しようとしている際中であり、いかにして兵力や経済力を充実さすか。それから、もう一つは思想統一するために、一生懸命になつておるときですから、天子はそれに飛びつきました。それに加えていつておりますが、『曲見伽藍というのには、無数の僧衆がありますが、それをみな国民に還俗させて結婚させたらよろしい。人口の増加を計らんとして結婚させる。それから尼僧も全部結婚させる。それによつて新たに國の人口は急速に増加し、兵力も増加する。生産力も増加する。』『そういうことをいつたのですから、天子は非常にその案に共鳴をいたしました。その代り、さすが天子ですから、道教だけを壊わしたり、仏教だけを壊わすということはしません。仏道二つの教団と、それから儒教も古典に書いてないお社を全部壊わしたのであります。そして、僧侶を還俗させました。ただし、大乗仏教は立派なものだ、といつております。』『わたくしは小乗の曲見伽藍を壊して、大乗仏教に目覚めさすために僧侶をやめさすんだ。通道觀という、仏教や道教の國立の研究所を作つた。そこに仏教に一生を捧げたい人、道教に一生を捧げた

い道士は、ここへおいでなさい。全て衣食住は国家が引き受ける。ただし坊さんの恰好ではいかん。官吏として迎える。結髪して、ここで官吏の服を着て、通道觀の学士として、生涯仏教・道教に貢献してくれ。』といつております。

そうして一挙に当時の東側にありました北齊という国をも全滅させてしまいました。方々を滅ぼして、統一を実現したわけです。北齊の占領地にも同じことをいたします。そこで、北シナ全体に、仏教なしの社会ができました。しかし、北周の武帝が亡くなりますと、やっぱり仏教全盛時代を迎えるのであります。国民の仏教感情がもう一度宗教なしには生きておれないというのであります。仏教の復興を願う。そういうことが急速に行なわれるのは、北周を革命いたしました隋の時代なのであります。北周の革命が、まだ起こらない時代に、すでに隋の創業者はその仏教復興に着手しております。その仏教復興に注意すべきことは、もちろん当時北シナで盛んになつておつた、いわゆる教相判釈であります。たくさんの仏典を総合して、その上下を定め、あるいは説法の時間を定めて、一つの仏教体系をつくるという事業が、シナ仏教徒の南北朝時代の大きな事業でございます。そういう仏教がもちろん復興してまいります。

しかし、伝統的仏教が復興する間にあって、一つ注意すべきことがありました。それは三種に要約されると思します。その一つは、三階教という興味ある仏教、それから、一つは弥陀念佛教、そしてもう一つが禪であります。三階教は要するに「普」ということを説いたのです。弥陀念佛教は「專修」というのを説いたので、この二つは同じ基盤に立つものであります。結論だけは、非常に違つたものになつてゐる。この二つとも要するに、反省しておりますのは、インドの釈尊が説いたお經を体系化して、これがいいとか、これが悪いとかいうようなことは重要でなく、果してそれが現代のわれわれの仏教であるかどうか、ということを考えなおさねばならないということであつた。それは、インド人の仏教である、『華嚴經』にしろ『維摩經』にしろ、それなどの思想の体系化よりも、現代の中国をいかに救うか、という問題と取り組まなければならないということであつた。

そして、その思想を煽るようになってきたのが、末法思想なんなります。“仏教では将来において禅定も行なわれない、末法の時代においては、破戒の坊さんばかりだ、実践のない仏教が起つてくる、そういう時代が末法である。その末法という予言があるが、その予言のときはまさに今、この廢仏のときには来たんだ。”と末法ということは、そういう予言だけでなく、もつと言ひ換えれば現代社会の仏教ということになります。現代社会がそういう戒律のない、あるいは禅定の行なわれない、ただ学問講釈だけの仏教だとするのです。実践をいかにすべきかということを考えねばならん。ところが、末法の人間は、罪なしには生きておれない人間である。そして、釈尊時代と違うことは、全ての人が凡人であるということなのです。聖者ではないということである。ところが教相判釈というのは、聖者の説かれたお經を批判するものであつて、凡人がやれることではない、やるべきことではない。凡人が聖者の説かれた經典を、これが良い教だ、これが浅い教だという批判を絶対にすべきではない。これは要するに經典に書いてある仏教の教えを謗るものだ。地獄の教である。われわれの行なえることは、全ての聖なる經典を三階教の人が、普という立場に立つて、普く敬う、あるいは普く礼する。こういうこと以外に、われわれ凡人を救済してもらう道はない。

そういう立場に立つたら、もう一つ注意すべきことは、われわれは末法罪惡の凡人であるから、見捨てるべきものではない。われわれはみな仏になる性格をもつておる。言い換えれば、いつかは仏になりうる可能性を持つてゐる。その全ての人々は、我も汝も、ともに仏性仏という名の仏になり、将来仏となる。だから全ての人が仏性仏、あるいは将来仏として、尊敬し合わなければならぬ。お互に礼拝されるべきである。それは『法華經』の常不輕菩薩が実行していることであるから、われわれはもつとお互いに尊敬し合わなければいけない。仏性仏として礼拝すべきである。

さらに仏・菩薩について、地蔵菩薩がいいとか、阿弥陀仏がいいとか、弥勒菩薩がいいとか、仏に差別をつけることは、もちろんいけない。われわれはどの仏、どの菩薩も普ねく礼拝する。そしてわれわれの邪魔をするもの——悪魔——もよく考えてみると、釈尊にも悪魔が誘惑に來た。その悪魔の誘惑が起源となつて、成仏された。邪魔する悪

魔があつたら邪魔仏として感謝すべきである。あらゆるものを、全て感謝していくという普教普行の立場に立つ。どんなことでも仏行で、仏陀の行でないものはない。自分は戒律が守れないから、戒を捨戒する。戒を破戒するよりも戒を捨てる。わたくしは授かりましたがやめますと。捨戒して、比丘から沙弥になります。とても比丘などという地位にはおられません。捨戒して沙弥となりましょう、と。そして沙弥となつた彼は、常に僧侶の一番末席にすわつた。それからまた、全てのものが仏行だというので、長安というところに迎えられております。長安は坂の多いところで、その坂の下に車がきますと、車の後を押して坂の上に行きます。あなたのおかげで菩薩の行、仏の行をさせていただきました。礼拝をして別れて行くというようなこともやつたんですね。

そういうような人の教えがですね、現代仏教の一つとして、末法仏教の一つとしておこつてきた。これは信行という人によつてであります。同じ時代のちょっと後輩ですが、道綽という人が、わたくしは阿呆だ。わたくしは何もできなかつから、そんなことよりも唯一つだけしかできない。自分らにできることは、ただ弥陀念佛をするだけで充分だ、と。すべての人ができる行だということで、専念仏行にするんだわけであります。その弟子が善導であります。唐の初めの時代であります。禪はそれに対して、正反対だと思います。わたくしは愚である、悪人である、罪人である、廢れ者である、というのに對して、我こそは仏そのものである。自分の内証しておる仏性に覺めていこう、と。その仏性の自覚の上に、自分の心と体を打ちつけて実際仏になろう。自己を自己の尊厳に目覚めさせた宗教運動です。ちょうど達摩から二、三代経過した時代が復興時代です。そういう自己尊嚴に目覚めた禪者が、非常に苦しい修行に自分をぶつけていったことが新しい運動として起るわけであります。このように廢仏毀釈の逆縁によつて中国仏教の深い思想が形成されるのでありました。